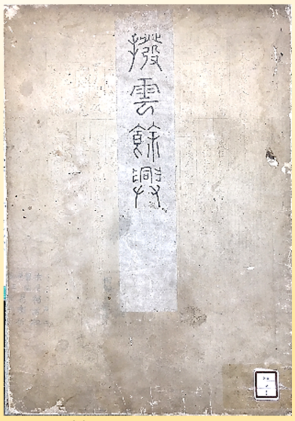
第6章　晩年

武四郎は、アイヌの人びとを苦しめていた場所請負制度の廃止を求めていましたが、開拓使での派閥争いや政策に関われないことなどを憂い、明治3（1870）年3月辞表を提出し、開拓使を辞職します。晩年の武四郎は、執筆活動、出版、旅など精力的に活動を続けていました。明治14（1881）年には、菅原道真の旧跡、聖跡二十五霊場を巡礼し「聖跡二十五霊社順拝双六」を残し、明治18（1885）年から明治20（1887）年に大台ヶ原（奈良と三重の県境）を3年間毎年登り記録しています。3度目の旅の様子は、明治20（1887）年刊『丁亥前記』にまとめています。同様に富士山登山については『丁亥後記』に書いています。

また武四郎は、古い物を収集、研究、好む、「好古家」の一人として、大森貝塚で有名なE・S・モースにもその名を知られていました。武四郎が収集した古物の図録に『撥雲餘興（はつうんよきょう）』、『撥雲餘興』二集があります。各地を旅して出会った人や物、情報など武四郎の人生を象徴した「一畳敷（いちじょうじき）」という書斎を1886（明治19）年に建築し、その完成を記念して全国の知人や友人から提供された寺社仏閣の古材の由来を『木片勧進』に記し、友人たちに配りました。死後、その古材で遺体を焼き、骨を大台ケ原に埋めて欲しいと願い明治21（1888）年、東京の自宅で71歳の生涯を終えました。



『撥雲餘興』 明治10（1877）年刊

北海道函館で武四郎が入手した未完成の磨製石斧

『撥雲餘興』は木多色刷りでB4ほどの大きさがあり、見開きの図をひと続きの図として鑑賞できるように、中央の綴じ目のできない画帖仕立てが採用されています。両端の縁を糊付けし、一葉ずつつなぎあわせて仕立て、大変手間のかかる方法ですが、石器、古銭、青銅器などの収集品を実物大に写すことができます。

『木片勧進』明治20（1887）年刊

8年余りをかけ、全国から古材を集めて造られた「一畳敷」は武四郎の交友関係が全国に及んでいたことも象徴しています。